様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ２０００９

研究課題名（和文）バントゥ諸語におけるコピュラの通時的機能変化の研究

研究課題名（英文）The functional development of copulas in Bantu languages: a cross-linguistic study

研究代表者
古本　真（Furumoto, Makoto）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：２０７９６３５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：場所動詞や存在動詞、姿勢動詞が、名詞／形容詞述語文を形成するコピュラへと機能を変化させたり拡張させることは、通言語的にみて十分にありうる。本研究では、バントゥ系諸言語の資料を精査し、そこから得られたデータを対照させることで、バントゥ系言語のコピュラの機能の通時的変遷の解明を目指した。
バントゥ系言語の記述資料を精査した結果、バントゥ祖語の*-baに遡る形式が、いくつかの言語で、現在の状況を表す場所述語や、コピュラとして機能していることがわかった。そして、言語ごとの用法の違いから、この*-baに遡る形式が、場所動詞からコピュラへの機能の拡張の途上にある蓋然性が高いことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文法化と呼ばれる文法形式の発達は、離散的にではなく、一定の普遍的な傾向に沿って生じると考えられている。文法化に関してどのような普遍的な傾向があるのか、また、どのようなプロセスを経て文法化が進展するのかは、研究者の関心を集めるトピックの一つである。
本研究では、場所叙述や名詞／形容詞叙述に用いられる動詞に関して、バントゥ系の言語でも、世界のほかの言語でみられるのと似た変化が生じている可能性が高いことを明らかにした。この研究の意義は、これまで見落とされてきた個別言語の記述データに着目したこと、そうした記述データを類型論的な議論に落とし込んだところに集約できる。

研究成果の概要（英文）：Cross-linguistically, locative, existential, and posture verbs tend to develop into general copulas covering nominal and adjectival predications. To reveal the process of diachronic change of copulas in Bantu languages, this study examined the data retrieved from written grammars and descriptions of Bantu languages. Consequently, I found that the use of reflexes of Proto-Bantu *-ba ‘be, become’ varies between languages. The functional variation of reflexes of *-ba allows us to consider that it can take a diachronic path from locative to general copula, a cross-linguistically observable tendency.

研究分野：言語学

キーワード：コピュラ　場所述語　バントゥ　類型論　文法化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

名詞や動詞といった内容語からある特定の文法機能を担う機能語（ないしは機能形態素）への変化や、機能語がもつ機能の変化（ここではまとめて文法化 (Grammaticalization)と呼ぶ）は、世界中の言語で報告されている。そして、こうした文法化は、離散的にではなく、一定の普遍的な傾向に沿った形で生じると考えられている。文法化に関してどのような普遍的な傾向が認められるのか、また、どのようなプロセスを経て文法化が進展しうるのかというのは、言語の普遍性や多様性を探る言語類型論研究の分野で、研究者の関心を集める大きなトピックの一つとなっている (e.g. Bybee et al. 1994; Heine & Kuteva 2002)。

名詞／形容詞述語文を形成するコピュラ（例：「太郎は学生である」）に関しても、存在動詞や場所動詞（（例：「太郎は家にいる」）に由来するというのは、通言語的によくみられることである (Faverey et al. 1976; Devitt 1990; Hengeveld 1992)。バントゥ系言語でも、ピジン・クレオール化したスワヒリ語諸変種で、もともと場所述語として機能していた形式が、場所だけでなく、名詞述語文でも用いられるようになっていることが知られている (cf. Ashton 1947; Nassenstein 2015)。

本研究がターゲットにするのは、こうした機能の変化である。上記のスワヒリ語諸変種の場合は、形態的特徴や、スワヒリ語がアフリカの内陸部に拡散した歴史的背景から、その文法形式が経た通時的変化を容易にトレースすることができる。しかし、このような、もともと存在動詞や場所動詞であった痕跡が見いだせない場合でも、その機能や用法の偏り、また同源の形式の用法の差異に着目した複数の言語変種の対照から、機能変化を経ている蓋然性が高いコピュラもある。

例えば、スワヒリ語マクンドゥチ方言のコピュラ動詞-wa の完結形は、語彙集をみると、英語の be 動詞の現在形 ‘is’, ‘are’ に対応するものとされている (Chum 1962/63)。しかし、実際の用法は、主語の属性や性質、状態、いる場所を表す叙述文に限定され、主語の指示対象の同定のために用いることは、（基本的に）できない。また、このコピュラ動詞の使用は場所叙述文では義務的な一方、名詞／形容詞述語文では随意的となる。このコピュラ動詞のもともとの用法は、場所叙述であり、それ以外の用法は二次的に生じたと考えてみよう。この仮説は、存在動詞からコピュラへの変化が生じる際に、まず叙述文で用いられるようになるという類型論的な観察と合致する。また、コピュラ動詞-wa の名詞述語文における随意性も、名詞述語文における用法が比較的最近生じたものであることの傍証とみなすことができる (Furumoto 2015)。

場所述語文や名詞／形容詞述語文を形成する文法的ストラテジーは、基本的にすべての言語が兼ね備えているが、どのようなストラテジーをとるかは言語によってさまざまである。これは、歴史的系統関係を一にして、比較的似た言語特徴を持つとされるバントゥ系諸言語同士を比較してもいえることである。バントゥ諸語のコピュラの類型的特徴は、研究者の関心を集めてきたが(e.g. Gibson et al. 2019)、その類似性や多様性がどのような意味を持つのかという問いに対して積極的に答えを与える研究はほとんどなされてこなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、バントゥ系言語のコピュラが、どのような通時的変遷を経て、現在観察される用法を獲得するに至ったかを解明することにある。これにより、バントゥ諸語の場所動詞やコピュラの多様性や類似性に対して、通時的視点から説明を与える。

３．研究の方法

本研究では、バントゥ系言語の参照文法や記述資料から、存在表現や場所表現で用いられる形式がそれ以外の名詞・形容詞述語文で用いられる文法形式の否かに着目しながらコピュラのデータを収集する。この点に関する言語間の共時的な差異に基づいて、バントゥ系言語のコピュラが辿ってきた通時的変化の普遍性と多様性を網羅する妥当な仮説を探ろうというわけである。

４．研究成果

バントゥ系言語では、コピュラや場所述語として、同源の形式が用いられる傾向がある (cf. Gibson et al 2019; Bernander & Devos 2022)。本研究では、このなかでも、バントゥ祖語に再建される動詞*-bá に対応する形式に着目した。この*-bá には、‘dwell, be, become’ という英語の訳が与えられているが (Guthrie 1967-70; Bastin et al. 2002; Rose et al. 2002)、その用法は言語ごとに異なる。ある言語では、もっぱら、時制やアスペクトを表す助動詞形成に用いられるが (cf. Botne 1986)、一部の言語では、名詞叙述文や、場所叙述文の述語として用いられる。

例えば、上述のマクンドゥチ方言の-wa は、バントゥ祖語の*-bá に対応する形式である。この-wa の用法を以下の (1) に列挙する。なお、(1d)の通り、同定を表すのは、主語が 1 人称単数か 2 人称単数である場合に限られる。

(1) マクンドゥチ方言

a. ka-wa kiambo-ni vao
SM1-COP.PFV village-16.LOC their.16
「彼は彼らの村にいる」（場所）

b. ka-wa uchi
SM1-COP.PFV naked
「彼女は裸である」（状態）

c. ka-wa mwalimu
SM1-COP.PFV teacher
「彼（女）は、教師である」（属性）

d. nyi-wa hidaya
SM1SG-COP.PFV Hidaya(PN)
「私はヒダヤ（人名）です」（同定）

同形の述語は、スワヒリ語の別の方言であるトゥンバトゥ方言でも用いられるが、トゥンバトゥ方言での用法は、もっぱら場所と状態の叙述に限られる。この述語の用法は、二つの方言の間で異なるのである。

-wa という動詞の完結形が、場所述語からより一般的なコピュラへの変化の途上にあると考えてみると、マクンドゥチ方言とトゥンバトウ方言の違いは、それぞれの言語変種がコピュラ動詞の機能の変化に関して、異なる通時的段階に位置づけられることを示すものと解釈することができる。また、この仮説のもとでは、マクンドゥチ方言の同定の用法も、機能の拡張の結果生じたものと考えられる。この用法が、1 人称単数、2 人称単数の主語に限定されるのは、まだ機能の変化が不完全であることを示す。

これまでのバントゥ系言語の類型論的研究ではほとんど取り上げられてこなかったが、本研究の調査の結果、ほかのバントゥ系言語でも、バントゥ祖語の*-bá ‘dwell, be, become’ に遡る形式が、(1) に示したような用法をもつことがわかった。以下に、そうした言語と、それぞれの言語における用法をまとめる。

(2) *-bá に対応する形式を場所述語やコピュラとして用いる言語
- 場所：マオレ語 (Rombi 1983)、マテンゴ語 (米田 2000)、マコンデ語 (Kraal 2005)
- 場所、状態：マクウェ語 (Devos 2008)
- 場所、状態、属性：ンデゲレコ語 (Ström 2013)
- 場所、状態、属性、同定：マンダ語 (Bernander 2017)

場所述語から一般的なコピュラへの変化という仮説は、スワヒリ語の方言間の違いだけでなく、(2) に示した言語間の差異とも整合性がある。言い換えると、バントゥ諸語をより広くみても、*-bá の機能変化には一定の傾向を見出すことができるのである。

ここで取り上げたスワヒリ語の二つの方言と、(2) に示した言語の間では、*-bá に対応する形式が、完了形 (perfect)、あるいは完結形 (perfective) に活用することで、現在の状況を表している。この共通する形式的特徴も、機能変化に関して示唆を与える。多くのバントゥ系言語では、状態変化動詞が、完了形や完結形に活用した場合、結果状態が表される。こうした結果状態は、復元可能で非永続的、つまり一時的である(cf. Crane & Persohn 2019)。*-bá に対応する動詞が、こうした状態変化動詞であるという指摘があるが (Bernander 2017; Furumoto 2022)、仮にその通りであるならば、*-bá に対応する動詞は、もともと一時性を強く含意する形式で、機能拡張の過程で、その含意が徐々に失われていったことが推測される。実際、一時性を表す痕跡はスワヒリ語マクンドゥチ方言や、マテンゴ語の記述にみられる (米田 2000; Furumoto 2022)。姿勢動詞や、場所動詞に由来するコピュラが一時性を含意するというのは、バントゥ諸語以外の観察のなかでも指摘があるが (Faverey et al. 1976; Devitt 1990; Verhaar 1995)、バントゥ系言語の*-bá に関しては、その一時性を、動詞の語彙アスペクトと活用の組み合わせに帰することができる。

これまでのバントゥ系言語の系統内類型論の研究においては、場所叙述や名詞／形容詞叙述を表す形式にどのようなバリエーションがあるかという点に注目されていた。それに対して、本研究では、それぞれの形式がどれだけのことを表せるのかという点に焦点を当てた。そしてその結果として、*-bá に対応する動詞の通時的機能変化の道筋を描きだすことに成功した。

バントゥ諸語をはじめとするアフリカの言語の多くは、歴史的資料が残されておらず、記述資料を用いて、言語変化のプロセスを明らかにすることになる。こうした研究は、バントゥ諸語研究

では伝統であり、今なお盛んにおこなわれている (cf. Meeussen 1967; Bostoen et al. eds. 2022)。本研究では、新たな切り口で言語の記述資料を見直し、通言語的な立場からの文法化研究も踏まえながら、同源の形式の通時的な機能の変化のプロセスを描き出した。本研究の成果、そしてその着眼点は、バントゥ諸語研究の伝統に対して、新たなインパクトを与えるものである。

なお、バントゥ系言語のなかには、現在の属性叙述や、場所叙述に、*-bá ではなく、*-dì 'be' という祖形に遡る形式に遡るものを使うものも多く存在する。それぞれの言語における人称ごとの用法の違いや、言語間の用法の違いからは、この*-dì 'be' に対応する形式も、*-bá に対応する形式と同様の変化のプロセスを経ていることが考えられる (cf. Whiteley 1966; Jerro 2015)。今後は、こうしたほかの形式に対する観察もさらに進めていきたいと考えている。

参考文献

Ashton, Ethel O. 1947. *Swahili grammar, including intonation* (2nd ed.). London: Longman.

Bernander, Rasmus. 2017. *Grammar and grammaticalization in Manda: An analysis of the wider TAM domain in a Tanzanian Bantu language* (Doctoral dissertation). University of Gothenburg.

Bostoen, Koen, Gilles-Mauricede Schryver, Rozenn Guérois, and Sara Pacchiarotti (eds.). 2022. *On reconstructing Proto-Bantu grammar*. Berlin: Language Science Press.

Botne, Robert. 1986. The temporal role of Eastern Bantu -ba and -li. *Studies in African Linguistics* 17(3): 303–317.

Bybee, Joan L., Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar*. Chicago: University of Chicago Press.

Chum, Haji. 1962/63. A vocabulary of the Kikae (Kimakunduchi) dialect. *Swahili* 33(1): 51–68.

Crane, Thera Marie, and Bastian Persohn. 2019. What's in a Bantu verb? Actionality in Bantu languages. *Linguistic Typology* 23(2): 303–345.

Devitt, Dan. 1990. The diachronic development of semantics in copulas. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 16: 103–115.

Devos, Maud. 2008. *A grammar of Makwe: Palma, Mozambique*. München: Lincom Europa.

Devos, Maud, and Rasmus Bernander. 2022. Proto-Bantu existential locational construction(s). In Koen Bostoen, Gilles-Mauricede Schryver, Rozenn Guérois, & Sara Pacchiarotti (eds.), *On reconstructing Proto-Bantu grammar* (pp. 581–666). Berlin: Language Science Press.

Favery, Margot, Breda Johns, and Fay Wouk. 1976. The historical development of locative and existential copula constructions in Afro-English creole languages. In Sanford B. Steever, Carol A. Walker, & Salikoko S. Mufwene (eds.), *Papers from the Parasession on Diachronic Syntax* (pp. 88–95). Chicago: Chicago Linguistic Society.

Furumoto, Makoto. 2015. On the copula in the Kikae dialect of Swahili. *Swahili Forum* 22: 20–41.

Furumoto, Makoto. 2022. Clues about functional development of the Kimakunduchi copula. *Working Papers in African Linguistics* 1: 29–51.

Furumoto, Makoto, and Hannah Gibson. 2022. Variation in Kimakunduchi and Standard Swahili: Insights from verbal morphosyntax. *Linguistique et Langues Africaines* 8(1).

Gibson, Hannah, Rozenn Guérois, and Lutz Marten. 2019. Variation in Bantu copula constructions. In María J. Arche, Antonio Fábregas, & Rafael Marín (eds.), *The Grammar of Copulas Across Languages* (pp. 213–242). Oxford University Press.

Guthrie, Malcolm. 1967-1970. *Comparative Bantu: An Introduction to the Comparative Linguistics and Prehistory of the Bantu Languages* (4 vols.). Farnborough: Gregg Press.

Heine, Bernd, and Tania Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hengevald, Kees. 1992. *Non-Verbal Predication: Theory, Typology, Diachrony*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Jerro, Kyle. 2015. Copulas and the semantics of location. In Christopher Brown, Qianping Gu, Cornelia Loos, Jason Mielens, & Grace Neveu (eds.), *Proceedings of the 15th Meeting of the Texas Linguistic Society* (pp. 91–105).

Kraal, Perter Jacob. 2005. *A grammar of Makonde (Chinnima, Tanzania)* (Doctoral dissertation). Leiden University.

Meeussen, A. E. 1967. Bantu grammatical reconstructions. *Africana Linguistica* 3: 81–121.

Nassenstein, Nico. 2015. *Kisangani Swahili: Choices and Variation in a Multilingual Urban Space*. München: LINCOM GmbH.

Rombi, Marie-Françoise. 1983. *Le shimaore (îlede Mayotte, Comores): Première approched'un parler de la langue comorienne*. Paris: SELAF.

Rose, Sarah, Beaudoin-Lietz Christa, and Derek Nurse. 2002. *A glossary of terms for Bantu verbal categories: with special emphasis on tense and aspect*. München: Lincom Europa.

Ström, Eva-Marie. 2013. *The Ndengeleko language of Tanzania* (Doctoral dissertation). University of Gothenburg.

Verhaar, John W. 1995. *Toward a Reference Grammar of Tok Pisin: An Experiment in Corpus Linguistics*. Honolulu: University of Hawai‘i Press.
Whiteley, Wilfred Howell. 1966. *A study of Yao sentences*. London: Clarendon Press.
米田信子．2000.「**マテンゴ語の記述研究（バンツー系，タンザニア）：動詞構造を中心に**」**（博士論文）**東京外国語大学.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Makoto Furumoto; Hannah Gibson	４．巻 8
２．論文標題 Variation in Kimakunduchi and Standard Swahili:Insights from verbal morphosyntax	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Linguistique et langues africaines	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/lla.1994	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Makoto Furumoto	４．巻 1
２．論文標題 Clues about functional development of the Kimakunduchi copula	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Working Papers in African Linguistics	６．最初と最後の頁 29-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Makoto Furumoto	４．巻 16
２．論文標題 Two Narrated Folktales in Kitumbatu: Wealth or Blessing, The Woodcutter and the Angel	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Asian and African languages and linguistics	６．最初と最後の頁 351 -371
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　1件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 古本真; ハナ・ギブソン
２．発表標題 バントゥ諸語におけるコピュラ動詞の機能変化のプロセス (The functional evolution of reflexes of Proto-Bantu *-ba)
３．学会等名 言語記述研究会第 129 回例会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Makoto Furumoto
２．発表標題 Rethinking the historical relation of Zanzibar Swahili with Comorian
３．学会等名 Closing workshop ILCAA-BantUGent Joint research project "The Past and Present of Bantu Languages: Integrating MicroTypology, Historical-Comparative Linguistics and Lexicography"（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Makoto Furumoto
２．発表標題 An introduction to the rural Swahili dialects of Zanzibar
３．学会等名 SOAS Linguistic Webinar（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Makoto Furumoto; Malin Petzell
２．発表標題 Exploring the diachronic link of the perfective between Zalamo and Makunduchi
３．学会等名 BantUGent meeting（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Makoto Furumoto; Yasunori Takahashi
２．発表標題 Emergence of the conjoint/disjoint distinction in Kimakunduch
３．学会等名 BantUGent-ILCAA Joint Research Workshop "The Past and Present of Bantu Languages: Integrating Micro-Typology, HistoricalComparative, Linguistics and Lexicography"（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Makoto Furumoto; Nico Nassenstein; Daisuke Shinagawa
２．発表標題 Reorganization of classes 3, 11 and 14 in Bantu
３．学会等名 51st Colloquium on African Languages and linguistics（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Makoto Furumoto; Malin Petzell
２．発表標題 On the perfective in Zalamo and Makunduchi
３．学会等名 9th International Conference on Bantu languages (Bantu 9)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Furumoto, Makoto
２．発表標題 Clues about functional development of the Kimakunduchi copula
３．学会等名 The closing symposium of the ReNeLDA project: Establishment of a Research Network for Exploring the Linguistic Diversity and Linguistic Dynamism in Africa
４．発表年 2022年

１．発表者名 古本真
２．発表標題 スワヒリ語マクンドゥチ方言にみられる「来る」由来の時制標識の記述
３．学会等名 第21回文法研究ワークショップ：「言語記述と文法化をめぐる諸問題」
４．発表年 2022年

１．発表者名 Furumoto, Makoto; Nassenstein, Nico; Shinagawa, Daisuke
２．発表標題 Demonstrative systems in different Swahili varieties: Investigating cross-varietal developments
３．学会等名 Baraza Swahili studies conference 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ギブソン　ハナ (Gibson Hannah)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	エセックス大学			